*大阪府支援教育研究会会報*　　2012年10月号

# 大支援研ニュース

特別支援教育

平成24年10月10日発行
大阪府支援教育研究会
会長　　服部　至栄
（東大阪市立弥刀東小学校

ホームページでお知らせがある場合があります

http://daishienken.visithp.com/

ニュースや本会活動への問い合わせ・ご意見は、Mailにて件名に「大支援研問合せ」など「大支援研」を入れてください。

jimukyoku2009@daishienken.visithp.com

アドレスをテキストで載せるとスパムメールが多数届いてしまうので、画像で張り付けてあります。

**◇本年度の役員総会の予定　役員の方はご予定願います。**

第3回　日　時　：　平成25年1月17日（木）　午後3時～5時　：　アウィーナ大阪　3階　生駒の間

## 大支援研　創立６０周年記念研究大会報告

**全体会（花熊曉氏）報告　各分科会報告を添付します。**

**ホームページにはアンケートのまとめもアップしております。**

平成２４年８月８日（水）　大阪国際交流センター

大会テーマ　「 大阪の障がいのある子どもの今後の教育について」

－　一人ひとりのニーズに合わせた教育を　－

日時　平成24年8月8日（水）　午前9時30分～午後4時30分　会場　大阪国際交流センター

## 施設見学研修会報告

日時　平成２４年８月２１日（火）　見学先「（株）関西インフライトケイタリング」

**報告記事を添付します。**　会社の概要とＱ＆Ａ、アンケートをまとめました。

## 冬季研修会一次案内を添付します。　二次案内は 11 月下旬

日時 平成25年（2013年）1月26 日（土）　決まりました分については順次 HP に情報をアップします。

午前10時30分～午後4時30分　場 所 大阪国際交流センター

## 中河内支部　詳細記事はホームページにアップしてあります。

東大阪市支援教育研究会 林間学校の報告

６月１８日（月）から２８日（木）にかけて、東大阪市内の小中学校の子どもたちが５つのグループに分かれて、生駒山麓公園ふれあいセンターで、一泊二日の林間学校を楽しみました。

中河内支部 指導技術研修会の報告

「作って遊べる おもちゃ作り」～時間をかけずにある物で作れるテクニック～

講師：東大阪市立上小阪小学校　教諭 大西 正勝先生（支援学級担任）

日時：平成２４年８月２０日（月）　盛況のうち、終了しました。

## 他団体　関西国際大学子育て支援センター主催研修講座　案内添付

「自閉症の新しいアセスメント法と発達障害児の地域支援」

平成24年11月24日（土）13時―17時　関西国際大学　3階　301KUIS ホール

平成２４年　９月１３日

各　学　校　長　様
支援教育関係者　様

大阪府支援教育研究会
会　長　服　部　至　栄
（東大阪市立弥刀東小学校）

# 冬季研修会のご案内　（一次案内）

大阪府支援教育研究会主催で、以下の要項で冬季研修会を実施いたします。
現在、講座の内容・講師等についての検討をすすめております。
詳しい内容および申し込み方法については、後日、二次案内でお知らせいたします。
ふるってご参加ください。

記

(1)　日　時　　平成２５年（２０１３年）　１月２６日（土）
午前１０時３０分～午後４時　（１０時１０分　受付開始）
午前の講座（１０時３０分～１２時３０分）
午後の講座（午後２時～４時）

(2)　場　所　　大阪国際交流センター
大阪市天王寺区上本町８－２－６　　℡　(06)6772-6729

(3)　内　容　　午前・午後　それぞれ　いくつかのテーマ別講座を実施いたします。
詳しい内容は二次案内でお知らせします。

(4)　詳細および申し込み方法
後日、二次案内でお知らせいたします。（１１月下旬を予定しています）
大支援研のＨＰおよびニュースをご参照ください。
http://daishienken.visithp.com/

(5)　問い合わせ先　　大阪府支援教育研究会　書記（研修部担当）　佐藤正幸
摂津市立第四中学校　　TEL　０６－６３４９－６１８１
FAX　０６－６３４９－６１８４

# 全体会　記念講演「障がいのある子どものニーズに寄り添う支援

# ～支援教育の動向と今後の課題～」

愛媛大学の花熊曉(さとる)教授に上記のテーマで講演していただきました。

まず愛媛のゆるキャラである犬の「みきゃん」が巨大なスクリーンに登場し、大阪府支援教育研究会（以下、大支援研）の創立６０周年をお祝いしてくれました。

講演は３部構成で、第一に、花熊先生のお父様である花熊四郎先生の事績について、大阪府教育委員会の特殊教育専任指導主事から文部省事務官となり、知的障害養護学校の学習指導要領作成にあたり、教科の枠組みで構成されつつも「一部もしくは全部を」合わせることができるよう現場の「領域論」の思いを盛り込むために粉骨砕身されたことや、ご自身の支援教育との関わりについてお話していただきました。

第二は、支援教育の観点に立ったユニバーサルデザインの授業づくりや個の違いを認め合い、尊重しあう学級集団づくりのポイントについて具体的に教えていただきました。①教室環境の整備　②肯定的で多面的に見る教師の子どもへの接し方　③学習や行動のルールの明示　④子どもが学習内容や授業の過程に見通しをもてるわかりやすい指示・説明　⑤一人ひとりの学習プロセスや学び方を尊重　⑥自尊感情・自己肯定感のもてる授業　など…。

第三は、「発達障がい」の青年・成人に見られる困難や課題から、概念的スキルに加えて子どもの将来に必要となる力として社会的および実用的スキルを身に付けさせること、自尊感情・自己肯定感を育てること、キャリア教育の意義と長期的な観点に立った支援・取組みの必要性についてお話されました。

そして最後に、先進的に取り組んできた大阪府の支援教育の視点はインクルーシブ教育そのものであり、今後も全国に発信していくことを期待されつつ、「大支援研」にエールを送ってくださいました。

花熊先生は２時間近く立ったまま熱い思いを語られ、支援教育に幅があっても参加者の多くの人が感銘を受け、学ばせていただいた講演でした。

## 全体会に参加された方のアンケートから（感想など　おもなご意見）

小学校

・支援教育の課題の中で「学級と授業の在り方の見直し」について、特別支援コーディネーターとして、通常学級の担任の先生方に、分かりやすく納得してもらい、学校全体として取り組んでいかなければならないと思いました。特別支援教育は、支援担だけが取り組むことではなく、一人ひとりの違いを互いに認め合い、尊重しあえる学級集団作りが必要という認識・意識を高めていくことが、これからの課題であると思いました。

・支援学級の子どもたちに対して、支援すること、その手立てなどばかり考えてきましたが、その子どもたちも他者のために何かをする経験、それによって自信がつき、自尊感情が高まり、いい循環になっていく、当たり前のことですが気づかずにいました。支援計画をまた見直してみます。

・特にキャリア教育の視点で「言葉遣い」や「身だしなみ」、適応行動を考えたスライドの新しい発見がありました。「障がいのある子どもが周りの人のために何ができるか」ということに目を向け、存在価値を見出すことを常に頭の中においておきたいです。

・最後のスライドが大阪の取り組みが目指してきたものと考えます。４つの領域がつながっていることがそれぞれの領域で中心的に取り組んできた人々が意識し、理解し、支援教育の視点でつながることが大阪のこれからの取り組みと考えます。行政（府教委、市教委）もそのことに向けて舵取りをしていただけるとありがたいです。小中高の取り組みに加えて、就学前や乳幼児健診からの家庭支援や親支援を一層充実させることが重要と考えます。家庭での子どもの役割、子どもの仕事を親と一緒に考え、実践できたら素晴らしい。
・日頃まとまりのない考えがすっきりとした講演でした。勤務する小学校では、支援学級２クラスとは別に、不登校児童を中心に集う生徒指導ルームがある。少人数だが、支援学級の児童より大きな課題を抱え、一人ひとりの今後に心労をそそいでいる。学力が低いが、支援学級への入級は拒否、学習はできるが気ままな登校で教師を翻弄している、掃除は嫌・暑いから嫌など理由をつけ帰宅したがる、基本的なことができていない状態。小学校で、基本的な生活の充実を得るために、親や他機関との連携の必要性と一貫性の重要性を感じた。
・小学校のうちからキャリア教育が大切なことがよく分かりました。保護者・教師は、つい目先のこと(学習がおくれないようにすること)ばかりに目がいきがちですが、将来、社会で生きていくために大事なこと、「当たり前のことを当たり前にしていける力」を身につける必要性を痛感しました。他にも他者のために役立つ体験、多面的な見方をする、身だしなみの意義など、大事な視点に気づかせていただきました。
・小学校では学習（読み書きなど）課題をすすめていく部分が多いなと思っています。（保護者の要望もあります）しかし、今日のお話で改めてソーシャルスキルの大切さを感じました。支援の必要な子も必要でない子も社会で生きていくためのルール、マナーをきちんと教えていかなくてはと思いました。
・キャリア教育と支援教育のお話はその通りだと思いました。学校を中心に考えてしまうので、その子が問題なく学校生活を送ればいいと考えてしまいがちですが、よく考えると学校を卒業してからの方が人生において長い時間ですよね。教育の目的が人生の質の向上であるという言葉が印象に残っています。現在関わっている子の中にあいさつ、返事などが難しい子がいます。その子が少しでも社会的行動ができていくように一緒に頑張りたいと思いました。
・「あたりまえ」を疑ってみるという言葉が大変心に残っています。毎日の生活の中で、子どもたちに「これが当たり前」と深く考えもせず話したり、提供してきたりしたことがたくさんあるのではないだろうか・・、と思っております。そして、できないからやらない！にならないよう、「したくなくても、しなくてはいけないことは、やらなければならないこと」を子どもたちに納得がいくように具体的にどのような支援や言葉が必要なのかを考えさせられるばかりです。
・分かりやすい話し方、内容でした。今まで自分なりにいろいろ考え、工夫し行ってきて一応の達成感を持ち、意欲も持ち続けています。今日のお話で、もう１ランク、２ランク上げた支援、きめ細かな支援をしなさい！と背中を押されている気持ちになりました。話を聞きながら今後すべきことが浮かんできました。
・自閉症教育の「構造化」のところで、「構造化」することが目的でなく、その中で何をどのように学ぶかが大切だということが印象的でした。自分自身も当たり前だと思って深く考えていなかったので、新しい感覚でした。今後、「あたりまえ」を疑ってみたいと思います。
・今回は支援教育を考える上で根源的な視点を学ばせていただきました。最初の話では、先生の立ち位置というか支援教育に携わられている根っこの部分を教えていただけ、その後での先生のお話にこれまでより熱意や思いをより感じることができました。また、医学的モデルとしての機械的な支援でなく、ニーズスペックとしての子どもの困り感やニーズからスタートする支援教育の考え方は子どもの現実からスタートすることを大切にする大阪の教育の流れにまさに合致するものだと思いました。
・小学校だけでなく、幼保から小中高での様々な実践についてわかりやすくお話していただき大変勉強になりました。そして、学校生活だけでなく、将来就労や社会人として生きていくことまでも見据えた話を聞けたことがすごく良かったです。日頃、つい目の前の細かいことにとらわれ、支援、指導し

ている自分ですが、どのように生きていく力をつけるかを考えた上での支援が必要と思いました。「キャリア教育で最も大切なのは小学部である」という言葉が心に残りました。そして支援教育の視点がすべての児童生徒のためのものであるということが、胸の中にストンと落ちた気がしました。

・先生のお話を聞いて、もう一歩踏み込んで先を見て支援を考えていかなければと思いました。今まで、本当に困っていることに添って何ができるかという視点ばかりで見ていたような気がします。そうではなく、「この子は周りの人のために何ができるのか」という考え方に、頭を打ったような気がします。結局、自己肯定感や自尊感情の先には“存在価値”があって、それは集団の中でしか育てられないものもあると思うと、やはり、クラス集団の環境としての重要さを改めて感じました。

中学校

・自分の問題意識ととてもマッチした話でした。授業の中で多面的な見方を教師が出来ているのか、できないことや、まちがうことが大切にされ「なぜできなかったんだろう。」「なぜまちがったんだろう。」と逆にまちがいが授業の深まりにつながるようにやっていきたいと思うのですが・・。しかし、現場は、時間は足りないし、教える、覚えさせなくてはいけない内容が多すぎです。子どもたち一人ひとりの表現さえ保障している時間がないのが現実な感じがしています。学び方が分かれば量は関係ないといいたいところですが、「教科主義」は相変わらず強いのです。教科と領域のバランスは教師一人ひとりの責任でやるわけですが…。

・大変わかりやすく自身の授業の参考になった。内容が盛りだくさんだったが、発達障がいの子どもたちが、成人になると「生きにくさ」に直面していくんですね。日本社会がもっと懐の深い社会になることを願います。今は何か違うと排除されてしまう、自分のことで精いっぱいの社会のように思えます。発達障がいの人たちは理解とちょっとした支援で働ける場がたくさんあるのにとても残念な気がします。

・多方面の話が聞けて参考になりました。キャリア教育、社会に出てからのことを踏まえた教育の大切さを痛感いたしました。現在、支援学級担任ですが、通常学級ではおとなしくて座っている生徒も支援学級では、甘えも出て行動が派手になり、叱る場面もあります。対応の難しさを感じます。日々勉強の毎日ですが、長いスパンでの教育を目指していかないといけないと思いました。

・父子二代の支援教育の足跡を見させてもらいました。幼くして亡くなられたお父さんへの思いがお話をより印象深くしました。中でも、キャリア教育のお話は、共感しこれから追求していきます。ありがたいことに２５歳くらいになった教え子と今も付き合い、就職についてリアルな話を教えてもらいます。その経験は現在の中学生にフィードバックできます。要はコミュニケーション力です。

・キャリア教育が学校活動の全ての場面で意識されるべきだと思いつつも、何となくあいまいな毎日を過ごしていました。授業中や学校生活における言葉づかいでパブリック、プライベートを意識させるということは、意図的に自分自身も取り組もうと思いました。今、不登校生徒と活動していますが、将来を見通し、今を生活するため、基礎体力、基本的生活習慣、身だしなみ、あいさつ、家庭での役割、働くことの意味など保護者と連携を取りながら今後取り組んでいきたいと思います。

・中学校にもなると、保護者からは「本人の自立に向けて」ということばがよく出てきます。進路を考える時期ということもあり、中学校になってようやく本人の将来をしっかり考える時期を迎えているような感じです。今日キャリア教育の話にもありましたが、中学校になってから「こうしよう」「こうなってもらいたい」と思っていては遅いということを痛感しました。しかし、中学校の３年間でもつけてあげられる力はたくさんあると思うので、できるだけたくさんの力をつけて卒業していってもらいたいと思います。

支援学校

・支援教育の観点に立った教育の大切さを教えていただき、また学校に戻って頑張ろうと思いました。いつか通常学級へ行った時も今の経験がユニバーサルな授業をするのに必ず役立つと信じて努力しよ

うと強く思いました。みきゃんがかわいかったです！

・学問的理論に基づいた実践紹介が数多くあったと考えていました。キャリア教育の充実も小からの重要性を知るために「やらねばならないことは、やらねばならない時にやらねばならない」保護者の「したくないことをこの子にさせないでください」という言葉だけに任せてはならないという事例などが印象的でした。授業づくり、集団作りの重要性。特に自尊感情や自己肯定感を育てるために授業とのコラボが必ず不可欠ということがよくわかりました。長期的な観点に立った視点こそこれからの重要な実践だと信じるご講演でした。

その他

・担任時代を振り返りながら、クラス経営などしていた頃を思い出しました。子どもたちの自立に向けての支援がとても大切であること。気づき等個性として学級でお互いを認めあえるクラスを目標に常にクラス目標を「〇〇（私の名前）ファミリー」として絆深く関わったこと、支援学校に進学した子も高校に進学した子と対等に接していたことなど・・・なつかしかったことでした。今、教育委員会におり、直接関わることはできませんが、巡回相談等で学校を支援する立場でよりプラスに励みたいと思いました。

・自立に向けての青年期の子どもを持つ母親です。身辺自立・社会性の獲得などは本当に大切だと痛感しています。自分では、その時その時で精一杯やってきたつもりですが、学びにくい子どもたちなので、限られた条件の中ではなかなか身につかないのが現実です。各々のサイクルで、しっかり親をサポートしていける専門家・専門機関が少ないです。（すぐ相談したいのに待機させられることが多い）親が悩みをすぐ相談できる、相談できるだけでなく、適切で見通しを持って指導できる人・機関が各々の地域で必要だと感じます。

・今まで発達障がいの子どもの支援についての講演を聞くと必ず、その子の「個性」として受け止めて！というメッセージが大きく発信されていることに、プレッシャーを感じてきていました。個性として、その子の理解ができれば話は早いのですが、学校は普段から様々な問題が起き、発達障がいのある生徒以外にも手がかかるので、今日の花熊先生のお話はそんな現場の状況をふまえた上での具体的なアドバイスで、ほっとする思いです。特に、お礼やあいさつができるといったコミュニケーション上の基本的な要を押さえること、基本的な生活リズムを整えること、授業中の言葉づかいの注意などが、社会的スキルの向上につながることを信じていこうと強く感じました。

・聴いていて納得できることばかりでした。「構造化」は何も特別な事ではない、常日頃私たちの生活の中、どこにでも見られることだと私も訴えています。周りの世界をわかりやすくすることは、全ての子ども達にとっても必要な事だと思うのです。ただ先生がおっしゃったように衝立やカードを使う事が構造化であると思われるのは残念です。まず環境を整え、混乱しやすい彼らがコミュニケーションを取ろうと思える相手が自分のつらさ、しんどさをわかってくれるという共感からまず始まるのではないかと思っています。自己肯定感、自己達成感をいかに学校生活の中で得ていくか、これによって大人への道がかわっていくのだと私も痛感しています。

・特別支援教育士として花熊先生の話をお聞きするのが楽しみです。より詳しくまとめられたハンドアウトがとっても役に立ちます。就労についての話がとっても興味があります。

・昔々、研修会に参加した時によく先輩方から「花熊先生、花熊先生」とお話しされる声を聞いておりました。珍しいお名前なので身内の方だろうとは思っておりましたが、ご子息だったのですね。お若くして亡くなられたのにあれだけの名声、ご努力ご検討が如何ばかりだったかと拝察いたしました。今日のご講演で保護者が「厭がることはさせないで！」と陥る誤りは、支援者が如何に“厭がる”ことを軽減するかを保護者とともに考えることですね。当たり前のこととして身につけられるようにするために！禁止の多い現場“感謝、ねぎらい”が多くなる現場になりたいものですね。

大阪府支援教育研究会　創立６０周年記念研究大会

2012 年８月８日　大阪国際交流センター

# 分科会　まとめ・報告

## 第１分科会　高等学校におけるともに学び、ともに育つ教育の実践

澁谷花菜子氏　（大阪府立西成高等学校）
大原有則氏（大阪府立枚岡樟風高等学校）
中川泰輔氏　（大阪府立松原高等学校）

澁谷花菜子氏からは、西成高等学校での障がいのある生徒について次のようなお話をしていただきました。2006 年度からは知的障がい自立支援コースが設置されているが、創立以来ほぼ毎年障がいのある生徒が入学しているため、クラス担任を中心とした全教職員で関わる体制がある。情報交換の会議を緊密に行うことによって、情報を共有している。毎年４月末頃に、なかま紹介ホームルームを行い、障がいのある生徒の自己紹介を冊子にして配布し、高校に通う全ての生徒が、障がいのある生徒について知る取り組みも行っている。

大原有則氏からは、共生推進教室の紹介や自立支援コースとの違いなどのお話をしていただきました。共生推進教室では、クラスやクラブ・たまがわ高等支援学校等での仲間作りを大切にしている。周りの生徒と共同作業をする場を設定したり、一番の理解者を発見し、そこからの広がりなどを支援している。卒業後の就労を目指しているので挨拶や言葉遣いに気を付けさせることや、職場実習やクラブ・発表の機会を多く経験することにより、本人が成長することが多いという話もしていただきました。

中川泰輔氏からは、昨年度に担任をしたＡさんに対しての支援の体験を基にお話をしていただきました。年度当初Ａさんは、「集団の中にいることが苦痛・何故だか学校に行きたくない」と訴えていた。課題は自己肯定感・人間関係の弱さであった。学校では担任を中心に色々な人が情報を共有しながら支援した。産業カウンセラーとも連携して支援した。そのような取り組みを通じて、自己肯定感や自己認知が高まり、「学校に来られる・学校行事に参加する」ことができるようになった。

３名の先生方の話で共通していたことは、色々な人が共通認識をもって支援をされていること・一人ひとりのニーズに合わせた教育を実践されていたことでした。参加者からは、入試や実際の生活についてなどの質問がでました。

## 第２分科会　関係機関との連携　実践報告　他機関と連携して自閉症スペクトラム障がいのある子どもたちの支援にあたった実践について

大澤佳世子氏　（大阪自閉症支援センター）
佐藤美恵氏　（高槻市教育委員会　教育指導課）
稲岡美香子氏、山中洋子氏（高槻市立第九中学校）

支援学級担任として、専門的な知識の足りなさや効果的な指導技術について悩むことがよくあります。特に初めて支援学級を担任した場合には、それが顕著にあらわれることがあります。

今回の実践報告では、自閉的傾向のある生徒への対応に外部の専門機関との連携を行いながら取り組み、専門的な知識のある教員の育成に取り組んでこられたペアサポート事業についてお話して頂きました。

教師は、ともすれば自分たちだけで解決しようとしがちですが、今回の報告では、外部の専門機関との連携、市内の教員のアドバイスを活かせる制度（リーディングチーム）など、色々な工夫がありました。また、市教委として障がい児教育を担う教員の養成に計画的に取り組まれており、この事業対象の学校を選ぶ場合には、支援学級担任だけでなく学校としての体制も重視されていることや、対象教員は事前書類や経過書類を書くことにより、児童生徒を見る視点や実態把握が確実になるとのことを話されていました。

専門的な知識の獲得、記録の重視、子どもへの寄り添い感等、支援教育に関わる者としての基本が大事にされていることがうかがわれました。

また、今回対象となった生徒の小学校時代の先生も会場におられ、成長した二人のステキな成長を感じましたとの感想を持っておられました。

報告のあといくつかの質問がありました。自閉症の子供が廊下を走ることの理由として、後ろを見ながら走っているというお答えがありましたが、全ての行動には理由があります。報告の中でもふれられましたが、氷山モデルで示しますと、外から見える行動に対処することばかりではなく、外から見えにくい「個々の自閉症の特性」を理解し、「なぜそのような行動が起きるのか」という視点から対応し支援をすると、子どもが自然に変わっていくのではないでしょうか、とのお答えをいただきました。また、校内での研究体制についても質問があり、支援学級担任だけでなく、通常学級担任も参加する等、全校的な取り組みをされていることが分かりました。

保護者は、子どもの成長をみてこられています。障がいだけでなく、その子のいいところ、しんどいところ等、私たち教員よりもよく知っておられます。そんな中で、保護者の信頼を得、子どもたちの成長のための支援を行うためには、正しい知識と子どもたちの将来に向けての見通しをもつ必要があります。今回の実践報告は、そんな私たちに一つの見通しを持たせてくれる取り組みだったと思います。

## 第３分科会　発達障がいのある子ども理解と具体的支援

### ○発達障がいのある子ども理解と具体的支援　　平野眞美氏（大阪府立守口支援学校）

発達障がい理解のために、特徴を具体的な例と共に説明していただきました。その上で、「環境づくり」「授業づくり」「学級づくり」の三つの支援のポイントにそって、多くの学校学級の実践を踏まえ紹介していただきました。担任が、その子とどう接するかを周りの子どもたちが手本にしながら成長していくことを念頭に置き、子どもをほめて認めて好きになって受け入れることで、すべての子どもを輝かせることができるという言葉が印象的でした。

### ○発達障がいのある子ども理解と具体的支援　～障がい理解をベースに「その子」理解を！～

浜崎 仁子氏（和泉市立光明台南小学校）、保護者の方々

障がい理解をベースにした『その子理解』をキーワードに、その子にあった方法を見つけ支援するヒントを保護者の方々のかかわりも含めて紹介していただきました。三人のお母さん方のお話からは、それぞれのご家庭の「その子理解」をもとにした日常の支援のようすと愛情がとてもよく伝わり心が温まりました。保護者の方の情報を元にして、教師が支援教育のプロとして支援の方法をいっしょに考えながらアドバイスしていくことの大切さがとてもよく理解できました。立場や役割をこえた「つながり」が、一人ひとりが豊かになる将来へのキーワードであるという浜崎先生の言葉が印象的でした。

**〇和泉市立富秋中学校の取組み　支援教育の視点からの生徒指導と学習環境作り**

**原田 尚史氏、玉野 良和氏（和泉市立富秋中学校）**

長年「荒れ」を克服するために、さまざまな方法を駆使し努力してきた中学校が、課題を持つ子どものことを「困っている子」という支援教育の視点を持って見つめ直し、関わりを持つことで学校を変えていく取り組みを行っているという報告をしてくださいました。授業のスタイルから学級や校内の環境づくりまで、ユニバーサルデザインの学校づくりを、支援教育部会を中心に組織的に行うことで、効果がでてきているそうです。チェックリストから得た情報をもとに、生徒それぞれにあったアプローチの方法について、近隣の学校や施設と協力して検討していくことで、誰にとっても安心できる学校づくりがこれからも続けられていくことだと思います。

## 第４分科会　「個別の教育支援計画」の作成と活用

**林　茂樹氏（大阪府立佐野工科高等学校定時制課程）**

**藤野洋子氏、丹羽はるか氏（大阪府立交野支援学校）**

林氏からは、佐野工科高校定時制課程の入学生の特徴と教育支援計画の作成を通じて、教育的に不利な条件におかれた子どもたちを支えていく力のある学校・インクルーシブな学校にしていこうとする取り組みが進められていること、年１回に終わらせない中高の連携や、多面的に子どもをとらえるために、関係機関との日常的な対話を大事にしていること、卒業後、社会に出て行くことを前提にした自立を目標に「支援計画」を活用しようとしていることが報告されました。

藤野氏・丹羽氏からは、①わかりやすく説明する力をつけよう　②保護者の気づきを促す「事前説明」の工夫　③ケース会議の工夫という構成で、ワークを交えながら報告が行われました。「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成に個々の教師がウンウン唸りながら追われるのでなく、ケース会議を工夫することで、もっと活用がはかられる「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成をめざす取り組みが発表されました。数多くの地域支援巡回相談の経験の中から生み出された実践で、ホワイトボードとデジカメを活用した「アセスメント」「プランニング」の会議の工夫は、すぐに使えるヒントを多く含んでいました。

２本の報告ともに、より具体性、効果のある「支援計画」「指導計画」作成につながるケース会議の進め方について多くの示唆を含んだ内容でした。

## 第５分科会　学校におけるＩＣＴの活用

**「ＩＣＴを活用した 10 年後の支援教室，支援学校の姿をパネルディスカッションを通して考える」**

**坂井聡氏　（香川大学教育学部）**

**小川修史氏　（兵庫教育大学大学院）**

**竹島久志氏　（仙台高等専門学校）**

**金森克浩氏（国立特別支援教育総合研究所）**

「10 年後の支援教育を想像して」をテーマにした研究発表とパネルディスカッションが行われました。

初めに、　①ＩＣＴを活用した支援の可能性　②ＩＣＴを活用した教員研修　③今後求められる支援機器の　３つのキーワードが提示されました。

坂井氏は、ＩＣＴの活用は新しい能力感の創造（その子の力を最大限に引き出すこと）であり、障がいを克服・改善するのではなく、生活上や学習上の困難さを改善・克服することを再確認するものであり、本人の能力と支援や機器だけに頼るのではなく、周囲の理解を広げていくことがより大切なことであるとお話されていました。

小川氏は、「ＩＣＴ機器を使うことが目的にならない」ようにすることが重要であり、そのためには、子どもの気持ちや立場に立って考え、なぜＩＣＴ機器や支援グッズを使うのかを教員がよく理解することが大切だと説明されていました。また、ＩＣＴ機器を使う柔軟な考え（トライ and エラーand フィッティング）を持つことが望まれると提案されました。

竹島氏からは、子どもの活動を中心に改造した重度・重複障がい児のための教育活動支援機器・ソフトの紹介がありました。また、特別支援学校と連携し教材や機器の開発に取り組んでいる福祉情報教育ネットワークの情報が紹介されました。

最後のパネルディスカッションでは、10 年後は、教員が教育のすべてを担うのではなく、多くのネットワークを広げ、ＩＣＴ機器が活用されているであろう。そのための教員研修（理論・実践・疑似体験・リフレクション）の繰り返しが大切であると話されました。

休憩時間には、ＩＣＴ機器を使った教材の展示があり、熱心に体験される先生方の姿がありました。

また、講演後は、講師の先生に質問される先生方が多く見られ有意義な研修となりました。

## 第６分科会　特別支援教育におけるキャリア教育

**亀平福一氏（大阪府立堺工科高等学校）**
**永松裕希氏　　（信州大学教育学部）**

亀平氏から、知的支援学校におけるキャリア教育の実践をお話しいただき、知的支援学校における職業教育について次のようにお話しいただきました。

キャリア教育とは、児童・生徒の実態に応じて、労働や就職・就労のみにとらわれず、「自分でやれることを増やしていこうとする態度・意欲」を育成する教育ということも含まれる。職業体験を通して本物と出会い、多様な気付きや発見を得させることも重要なことである。わからない時は質問でき、他者と協力できるということも重要な要素である。私たち指導者自身が常に社会背景の変化に対応していくことが必要である。学校と地域・企業が連携し、小・中学校の段階から自らの力で社会で生きていく力を育てることが大切である。

支援学校での実践と工科高校で実践されていることで、キャリア教育を進める上での具体的に重要な教育内容を話していただきました。

永松氏からは、特別支援教育におけるキャリア教育について次のようにお話しいただきました。

学校で出会った子ども達が幸せに過ごしているかどうか気になるところである。５年間の卒業生の就業者の追跡調査によると、離職理由トップは職場の人間関係である。人とどう関わっていくかがポイントとなる。卒業後、子どもにとって何が必要か、社会の中でどう生活するのか、個人の仲間集団への社会的スキル訓練が必要である。さらに、職場や社会が障がい者と共に生活するスタイルができていることが重要である。

質問の一つに、キャリア教育をどう充実させるかというのがありました。日本は、苦手なところで勝負させようとするが、この子にとって豊かな人生とは何か考え、練習ではなく生活を中心として必要としているものをカリキュラムにするという回答をいただきました。

2012 年度　行事部主催　施設見学会報告≪株式会社関西インフライトケイタリング≫

平成 24 年 8 月 21 日(火)9：30～12：00

「株式会社関西インフライトケイタリング」は、ロイヤルホールディングスグループ会社の一員として、関西国際空港開港時より現在まで、機内食の調製などの業務を中心に経営されている企業です。

会社概要等の説明の後、実際に職場の様子を見学させて頂き、その後質疑応答の時間が持たれました。

１．会社概要

設立：昭和 63 年(1988 年)8 月 30 日
従業員：170 名（内 7 名が障がい者、約 20 名が外国人スタッフ）
委託先社員：170 名
主な業務内容：1. 航空機内食の調製・販売・搭載、2. 食品(弁当など)の販売、3. 保税倉庫業、4. 空港ターミナルビルレストランの経営　など
顧客エアライン：26 社
受賞・認定履歴等：UA QualityFirst Award 2nd semi annual 2011 はじめエアライン受賞多数。大阪版食の安全安心認証制度第 1 号施設。日本国内の機内食会社で ISO22000 認証取得第 1 号施設。マレーシア航空ハラル規格認証。食品衛生有料施設厚生労働大臣賞など多数受賞。
HP: http://www.kicfinefood.com/index.html

２．障がい者の雇用について

現在は佐野支援学校との連携を密にしており、これまでに 8 名の障がい者を受け入れています。1 年間のスケジュールとしては、5 月頃に受入枠の確認、6 月と 10 月に約 2 週間の実習期間があり、それぞれの実習期間において、実習生の基礎能力・技能の確認などを行っているそうです。2007 年から障がい者の採用が始まり、現在までに 8 名が採用されています。実習時には、2 週間の実習スケジュールを渡し、予定の見通しを立てやすくしています。また、実習の際にレポートをつけ、実習生の作業ごとの適性を見ているようです。その人の能力が会社の仕事に適うかどうかではなく、その人の能力に合った仕事が会社にあるかどうかを判断するのだそうです。また、学校から事前に情報をもらい、実習時の適性判断を行いやすくしたり、色々な作業をしてもらうことで、隠れた能力を掘り起こす取り組みをしたりするなど、積極的に努めています。

そういった取り組みの中で、学校でつけてほしい力として、

・きちんと大きな声で挨拶ができる。
・意思表示ができる。
・時間、手順、ルールなど決めたことを守る。
・責任感
・整理整頓
・持続力
・ある程度のコミュニケーション力

をあげられていました。

さらに、障がい者を採用することについて、その良さを以下のように述べられました。

・健常者以上の能力を発揮する。
　その人が持っている能力を最大限発揮することで、単純作業の繰り返しなどにおいては、健常者よりも早く・正確に作業をこなすことが出来る。
・全体の生産性向上
　障がい者の視点でわかりやすくシンプルに作業工程の見直しや組み替え・改善をすることで、従前よりも全体の生産性が向上する。また、指導する側も人を教える力がつく。

・企業の社会的責任（CSR）を果たす
2012 年 1 月 1 日現在の雇用率は 8 名　3.0%、法定(1.8%)を大きく上回っている。（2012 年 8 月 21 日現在で雇用は 7 名とのこと）

2011 年には、大阪府障がい者就労サポートカンパニーに登録され、大阪府教育委員会より、「支援教育サポート企業表彰」を受賞されています。

３．施設見学

施設見学の前に、白衣・帽子・マスク・靴カバーなどを装着し、衛生環境を損なわない状態になってから、3 班に分かれて施設内を見学し、説明を受けました。食器類の仕分け、洗浄などの業務の様子を見る中で、障がい者の方の食器類の仕分けの手際の良さと、黙々と続けている姿勢に感心しました。

４．質疑応答

Q．障がい者の従業員の賃金は？
A．法に定める最低賃金は守っています。

Q．障がい者の雇用は、その人に何もなければ定年まで従事できるのか？
A．そう考えています。まだ 7 年ほどしか経っておらず、結婚や出産などの事態に直面していないので、具体例をあげることはできませんが…。

Q．障がい者の方の通勤については？
A．皆さん公共交通機関を利用しています。はじめは保護者の方と一緒に練習している方もいました。

Q．採用枠に関して、その枠にどれほどの人数が集まるのか？
A．採用については、支援学校と相談を重ねて、面接などを通して調整しています。

Q．障がい者の雇用や支援学校との連携をするに至ったいきさつを教えてください。
A．初めは、障がいを持った子の保護者の方がこちらに勤めていたことがきっかけでした。

５．お礼の挨拶　大阪府支援教育研究会　有山暁雄先生

以上　大阪府支援教育研究会　行事部

～参加者の感想～（一部抜粋）

・障がいのある方への支援によって、仕事の効率や全体の生産性が向上し、教える側の人間力の向上につながったというお話が印象的でした。また、その人の能力に合った仕事が会社にあるかどうかの視点で雇用されていることも印象的でした。
・会社の型に人を入れ込むというのではなく、その人にできることを探して、能力を開発するという考え方をされている会社で、すばらしい実践をされているところを見学できてよかったです。あの地道な作業を食の安全、衛生、サービスといった会社の信頼や質の向上をになう部門で黙々と働いていらっしゃる方々の姿に忍耐を感じました。多くの企業が障がい者に対してできることを増やして門戸を開いてほしいと思います。学校での力も磨いていきたいと思います。
・「その人の得手、不得手を見極めて仕事をしてもらう」と聞き、このように考え、採用してくれる会社がもっと増えて、障がい者の方が活躍できる場が増えればいいなと思いました。「学校でつけてほしい力」の話も印象に残りました。ルールを守る等、小さいころから指導し、身につけさせてあげなければと思いました。
・説明の中の「学校でつけてほしい力」というのは、生活していく中でも基本となることなので、小学校生活や家庭生活の中で身に付けられるようにしていかないとと改めて思いました。施設内を見学させていただき、標語や図、写真等、シンプルで視覚に入りやすい掲示があり、参考にしたいと思いました。

関西国際大学子育て支援センター主催研修講座

# 「自閉症の新しいアセスメント法と発達障害児の地域支援」

関西国際大学子育て支援センター長　　藤 田 継 道

障害の早期発見・早期教育の重要性が叫ばれ，医学や発達心理学等が中心となった学際的な研究が進められ、飛躍的な成果が得られています。生まれてきたすべての赤ちゃんについて誕生直後から発達を追跡していき，発達障害の早期発見と早期療育を行って，多くの発達研究者から注目されている「糸島プロジェクト」のリーダーである、九州大学名誉教授大神英裕先生から、発達障害の早期発見と早期教育に関する最先端の研究成果と地域支援の方法についてご講義いただきます。

さらに、自閉症の場合，自閉症であるのかどうか，どういう特徴の自閉症であるのか，自閉症の重篤度はどの程度なのかの診断・アセスメントが的確に行われ，指導によってどこまで伸びたかを明らかにしていくこと（エビデンス・ベイスト・アプローチ）が求められる時代になってきました。こうした流れの中で，自閉症の治療や教育には，科学的根拠のある診断・アセスメントが実施されていなければならないことが国際的に規定され始め，そのための直接的な観察法である ADOS (Autism Diagnostic Observation Schedule) が用いられるようになっています。ADOS を正しく理解し実施するためには専門的な訓練を受ける必要があり、研究などで使用するにはさらにライセンス（資格）をとらなくてはなりません。日本で数人しか取得していないリサーチライセンスをお持ちの大阪大学大学院連合小児発達学研究科助教の実藤和佳子先生には、ADOS を中心とした自閉症のアセスメントについてご講義いただきます。

発達障害のある子どもの教育・福祉・医療・保健のお仕事に携わっている方々のご参加をお待ちしています。

＜主　催＞：関西国際大学子育て支援センター
＜後　援＞：兵庫県・神戸市・尼崎市・西宮市・伊丹市・宝塚市の教育委員会（予定）
＜日　時＞：平成２４年１１月２４日（土）１３時―１７時
＜場　所＞：関西国際大学　３階　３０１KUIS ホール（裏面の地図をご参照ください）

＜日　程＞

| 12:00 | 13:00 | 14:40 | 14:55 | 16:50 | 17:00 |
|---|---|---|---|---|---|
| 受付 | 『発達障害児の地域支援』 大神　英裕　先生 | 休憩 | 『自閉症のアセスメント―ADOS を中心に』　実藤　和佳子　先生 | 質疑応答 | |

＜講師紹介とご担当講義＞

**大神英裕先生『発達障害児の地域支援』** 九州大学名誉教授。糸島プロジェクトのリーダー。「発達障害の早期支援」の著者。「ジョイントアテンション」の訳者。心理リハビリテイション研究所代表。

**実藤和佳子先生『自閉症のアセスメント―ADOS を中心に』**

大阪大学大学院連合小児発達学研究科助教。我が国では数少ない ADOS のリサーチライセンス（資格）を取得しているお一人です。

＜参加費用＞：５，０００円（当日受付でお支払いください）
＜申し込み方法＞：「ファックス」または「メイル」に以下の必要事項を書いてお申し込みください。

**◎申し込み先**＝関西国際大学　教育推進課　Fax ： 06-6496-4321,　E-mail ： exc@kuins.ac.jp

**◎記入 事 項=** ①お名前、②ご所属（ご職業）、③電話とファックス番号、④〒と住所、⑤メイル・アドレス

＜締め切り＞１１月２１日(水)午後１０時

＜受付完了のご連絡＞「ファックス」または「メイル」で「受付票」をお送りします。24 日当日この受付票を持参し、受付でご提示ください。**問い合わせ（月~木）：子育て支援センター＝０６―６４９６―４３３９**

**金･土･日：子育て支援センター長=０９０－１９１０－５５２９**

# 申込書（自閉症の新しいｱｾｽﾒﾝﾄ法と発達障害児の地域支援）

関西国際大学

教育推進課宛

**FAX. 06-6496-4321**

**E-mail: exc@kuins.ac.jp**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1．受講者名（ふりがな） | 所属（職業） | 電話<br>ファックス | 〒　　住所<br>e-メール |
| 2．受講者名（ふりがな） | 所属（職業） | 電話<br>ファックス | 〒　　住所<br>e-メール |
| 3．受講者名（ふりがな） | 所属（職業） | 電話<br>ファックス | 〒　　住所<br>e-メール |
| 4．受講者名（ふりがな） | 所属（職業） | 電話<br>ファックス | 〒　　住所<br>e-メール |

**問い合わせ先：月～木＝関西国際大学子育て支援センター＝Tel 06-6496-4339**

**金・土・日＝子育て支援センター長＝（携帯）090-1910-5529**